



木下恵介記念館 No.13 2015.8.1 発行

# 栄町だより

Keisuke Kinoshita Memorial Museum

公益財団法人 浜松市文化振興財団  
発行：木下恵介記念館  
〒432-8025 浜松市中区栄町3番地の1  
TEL&FAX 053-457-3450  
E-mail: kinoshitakan@hcf.or.jp  
http://www.hcf.or.jp  
※ 無断複写・転載、放送、ネット流用を禁じます。

## 多くの音楽はドラマに入り込んでいた

♪人生楽ありゃ 苦もあるさ 涙のあとには 虹も出る  
歩いてゆくんだ しっかりと 自分の道を 踏みしめて♪

誰もが耳にたことのあるテレビ時代劇『水戸黄門』の主題歌「ああ人生に涙あり」です。この歌を作曲したのは、木下忠司さんです。実は先日、草加市の吹奏楽団の方から、この曲の中で掻き鳴らすような音の楽器について、照会がありました。

そこで木下忠司さんにお尋ねしたところ、キハーダ(馬やロバの顎骨を使った打楽器)ということでした。電話のお声ではお元気な印象をうけました。

さて、ご存知のとおり、木下忠司さんと言えば、映画監督木下恵介の実弟にあたります。武蔵野音楽学校(現在の武蔵野音楽大学)を卒業後、兄恵介監督の映画6作品目『わが恋せし乙女(1946)』で、初めてコンビを組んでから監督の遺作となった『父(1988)』に至るまで、恵介作品の音楽を40年余に渡り担当し続けてきた作曲家です。この他にも400本以上もの映画音楽をつくり幅広いジャンルの作品を手がけています。

また、木下忠司さんは、松竹大船映画の音楽の品格を上げたとも言われていますが、それまでの松竹の映画音楽とどんな違いがあるのか、興味があったので調べてみました。この点について、木下忠司さんは、インタビュー記事(「日本の映画音楽木下忠司の世界」解説書掲載)の中で、映画音楽の果たす役割について、次のように述べています。



木下兄弟スナップ(左:忠司 右:恵介)

「僕が入ったとき、松竹の映画音楽部長は万城目正さんだったし、コロムビアが付きっきりだった。だから、何か映画を作ると、必ずと言っていいほど、コロムビアが主題歌のレコードを作っていました。この場合、歌が映画より先行して作られることが多かった。作詞する人は、映画の題名とどんな話ってということだけ知っていて、脚本など読まずに詩を作ったりするから、とんでもない詩ができたりした。僕はたまたま映画を小さい時からよく観ていたので、映画のことは知り抜いていたし作曲も出来たから、主題歌を全部自分で作詞した。だから、映画の内

容にぴったり合っていた。そのかわりレコードは出来ませんよ。ダビングに間に合えばいいって作り方だから。封切りが終わって、あれはいい曲だからって、後でレコードになったことはありましたけどね。万城目さんの場合は、挿入歌ですよ。芝居やっている上に流れていくだけで、悲しい顔して歩いているところに、悲しい曲が入るだけでね。ドラマと結びついてはいなかった。僕がやったのは、兄貴(木下恵介)の演出のうまいせいもあったけど、歌そのものがドラマの中に入り込んでいるからね。」

「日本の映画音楽木下忠司の世界」解説書より

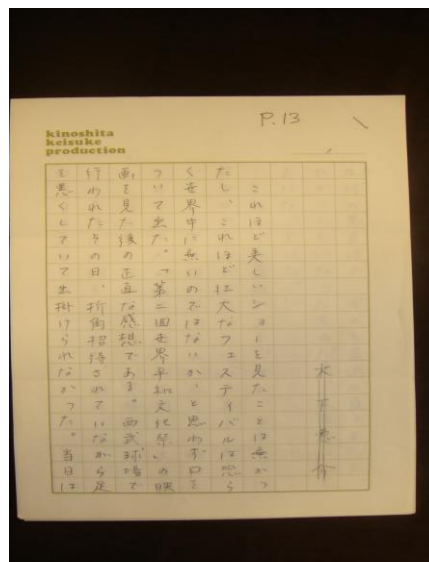
木下忠司さんは、与えられた歌詞に機械的にメロディをつけるのではなく、映画の内容、演出者の狙いや方向性などを理解した上で、詩と曲が渾然一体となった映画音楽を作り上げようとしたというのです。こうした映画音楽の新たな位置づけは、兄恵介監督の性格や映画作りを知り尽くしていた木下忠司さんにとっては、ごく当たり前のことだったのかもしれませんが。

(館長 原田昌典)

# 新 資 料 紹 介

## 木下恵介自筆原稿

この資料は、浜松市在住の影山隆様からご寄贈いただいたものです。1982(昭和 57)年 9 月、木下恵介監督は、埼玉県所沢市の西武ライオンズ球場で開催された創価学会主催の第 2 回世界平和文化祭へ招待されていましたが、あいにく足の具合が悪く出席できませんでした。そこで暮れの 12 月 29 日に開催された式典記録映画の試写会に再度招待された際、聖教新聞社聖教グラフ(現:グラフ SGI)編集部からの依頼を受け執筆したものです。

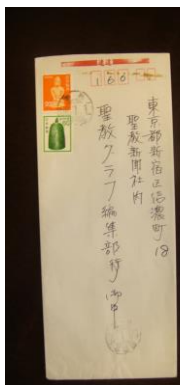


木下恵介自筆原稿

当時、影山様は聖教グラフ編集部にお勤めで、木下恵介監督への原稿依頼の担当者だったこともあり、大切に保管されていたそうです。

原稿は、200 字縦書き 5 枚。用紙は『kinoshita Keisuke Production(用紙左上印字)』専用のもを使用し、鉛筆書きです。映画監督らしく、式典の全体構成や場面展開に注目して“押し寄せる歓喜の波に声を上げたくなった”と感想を述べています。

翌年 1983(昭和 58)年 9 月には、木下恵介監督の 47 作品目の反戦平和をテーマにした映画『この子を残して』が公開されています。



封筒(表)



封筒(裏)

左の封筒は、原稿を聖教新聞社聖教グラフ編集部あてに送った際使用したものです。『麻布郵便局/昭和 58 年 1 月 1 日と新宿北郵便局/昭和 58 年 1 月 2 日』の消印があります。封筒は編集部が準備したもので速達扱いとなっています。裏面には、木下恵介監督が当時住んでいた『港区麻布狸穴(まみあな)』の住所が記されています。

木下恵介監督は、12 月 29 日の試写会后、わずか 2 日で書き上げ編集部あて郵送しています。

## お 知 ら せ

2 月 8 日(日)に開催した木下恵介生誕 100 年記念映画『はじまりのみち』特別上映会には、原恵一監督と松竹新弘隆プロティーマーにお越しいただき、撮影時のエピソードなど大変貴重なお話を伺うことができました。参加者から原監督へ、今後の実写映画への期待の声が多く寄せられていました。



## 来年度の予告

- ◇月例上映会(毎月第 3 日曜日開催)  
木下作品の中からキネマ旬報ベスト・テン入賞作品を中心に上映
- ◇特別上映会+講演会セット開催  
終戦 70 年記念特別上映会(3 作品上映)  
高峰秀子没 5 年記念特別上映会(1 作品上映)  
地元応援企画特別上映会(1 作品上映)
- ◇その他 コンサート・特別講演会・恵介生誕記念上映会・けいすけクラブ・栄町倶楽部も開催予定



※詳細は、今後配布の木下恵介記念館スケジュールなどご覧下さい。引き続き多くの皆様のご来館をお待ちしています。